



□巻頭言

次なる時代へ

熊本学園大学外国語学部准教授

東アジア学科長 土井 浩嗣

With コロナやコロナ時代ということばを耳にする毎日が続いています。今回の新型コロナウイルスの感

染拡大は、単なる疫病にとどまらず経済・国際秩序から私たちの生活・価値観まで一気に変えてしまうかもしれません。外出自粛が続き、先行きが見えない中、ときに悲観的に考える時間もありました。今も未来の答えはわかりませんが、近代以降の物質的な量を第一とする時代

□■□学科の最新ニュース！□■□

2020年度は新たに54名の新入生を迎えました。しかし、入学式は中止、オリエンテーションも教員、学生ともにマスク姿、そのまま遠隔授業に突入ということで、お互いにきちんと顔合わせができていないのが残念です。6月4日より一部の授業で対面式授業がはじまります。学生の学びをしっかりサポートしていきます。

から、人がより心地よく生きることに関心を置く時代へと移り変わるのではないかと、という希望的な未来もおぼろげながら感じています。今後リモート技術の劇的な発達と普及が容易に予測される中で、個の力で新しい環境に対応できる人材が一層求められてくるでしょう。いま教員も学生も確かな答えは持ち合わせていません。次なる時代へ向けて、学生と一緒に模索する日々がこれからはじまります。

□韓国語の副動詞形の研究

韓国語は、日本語の「～ながら」「～から」のように他の述語を副詞のように修飾する副動詞形を多く持っています。日本語の文法では、接続助詞などと呼ばれているものに相当します。韓国語はとにかくこの副動詞形の数が多く、似た意味を表す副動詞形同士の違いには、韓国語学習者の多くが困難を覚えます。例えば、日本語なら理由を表す「～ので」と「～から」はどのように異なるのか、というと同様の問題が生じます。そのような類似した副動詞形の区別以外にも、副動詞形に関する研究には明らかになっていないことがまだまだあり、わたしはそのような問題について研究しています。

具体的にわたしが興味を持って研究してきたのは、(1) 用言 + 副動詞形、(2) 副動詞形 + とりたて助詞、(3) 副動詞形 + テンス、アスペクト、ムード標識、(4) 副動詞形の独立用法です。ここでは日本語を例に説明します。(1) は、同時を表す「～ながら」と理由を表す「～から」を例に取れば、「食べながら」「食べるから」に対して「小さいながら」「小さいから」だと、「～から」の意味は同じなのに「小さい」に付いた「～ながら」は同時というより「～のに」に意味が近くなるという現象です。(2) について、とりたて助詞というのは「わたし {は/も}」の「～は」や「～も」のようなものを指します。「～ながら」と「～から」に「～も」を付けると「少ないながらも」と言うことはできますが、「少ないからも」のように言う

東アジア学科講師 黒島 規史 (新任)

ことはできないという現象があります。(3) は (2) と似ています。テンス、アスペクトというのは、過去形（～た）、進行形（～ている）に関するカテゴリで、ムードは推量（～だろう）や意志（～(し)よう）などに関わるカテゴリです。例えば過去形の「～た」を入れる場合、「食べたから」とは言えても「食べたながら」とは言えないといった問題があります。最後に (4) について、副動詞形というのは「K-POP が好きだから、韓国語を勉強する」の「～から」のように、普通その後になにか文が続きます。しかし「もうわかったから！」の「～から」は後になにも続きませんが、これで文としては完結しています。一方、「～ながら」はこのままで終わることはほとんどありません。

ここでは便宜的に日本語を例に取って説明しましたが、韓国語でも同じような現象があるわけです。ただ、似ているといっても日本語と韓国語は異なる言語なので、日本語と比較しつつ韓国語を研究するのは、パラレルワールドをのぞき込むようなワクワク感があります。韓国語、日本語と似ているモンゴル語やトルコ語なども副動詞形をたくさん持っているのだから、これからはそれらの言語との対照もしていきたいと考えています。

□「出張日記」に代えて

東アジア学科准教授 小笠原 淳

中国武漢から広まったとみられている COVID-19 が猖獗をきわめている。昨年 12 月の武漢での初検出から感染は瞬間に世界に飛び火し、先日の報道では感染者数が世界で 400 万人を突破したという。グローバル化した社会に潜むリスクを浮き彫りにした形だ。コロナ禍が過ぎ去ったあと、あるいは人類がそれと共存するよう強いられながら、今後の世界は変わっていかざるを得ないとされる。ポスト・コロナの社会では、様々な領域で社会的距離を十分に意識した、「新しい生活様式」の実践が求められるようになるようだ。この「新しい生活様式」の実践によって、私たちと東アジアの人々との交流の在

り方も、変容を迫られることになるに違いない。右肩上がりだった東アジアからの訪日客にもブレーキがかかり、インバウンド市場に大打撃を与えている。しかし、斜めに見れば、ここ数年で急激に増えたインバウンド需要は、異文化面で両国の相互理解を促したというよりは、一方的、消費主義的な側面が強かった。グローバル化の波にせかされるのではなく、この機会に少し立ちどまり、じっくりと相互の異文化を理解することも、隣国と末永く良好な関係を構築していくうえで大切なことではないだろうか。

□東アジアのあれこれ

東アジア学科教授 矢野 謙一

三千里（サムチョルリ）は朝鮮、朝鮮半島の異称である。朝鮮半島の長さ由来するという。初めて聞いたとき、「ええ！」と思った。1里は4km、三千里は1万2千kmという計算になる。北極から赤道までの距離は1万kmだから北半球よりも長くなる。おかしい。根拠を尋ねると、朝鮮の「里」は日本の十分の一で0.4kmだから、1千2百kmだという。だが、この値でも計算に合わない。朝鮮半島は、ほぼ北緯34度から北緯42度の位置にある。緯度1度間の距離が111kmだから、南北の距離は900km弱である。実は、半島の東南端と西北端の距離、半島を斜めに測った距離らしい。これだとほぼ1千kmで、それ

でも「三千里」は2百km、緯度2度の距離ほど多めに言っている。二千五百里と言えればいいのにと思ったが、しょせん「白髪三千丈」、「万里の長城」の世界である。数字に正確さは期待できない。阿蘇にも「草千里」という地名がある。数字は東アジア世界には修飾語であって、正確さをさほど求めない。今回の新型コロナウイルス感染症による死亡者数、ゼロという国からはじまり、実際より少なく言う国、いずれの国の発表も正確さを期待してない。これが東アジアの常識と思う。

□新書紹介

福永光司『莊子 内篇』

（講談社学術文庫、2011年）（朝日文庫版1978年）

以前紹介した福永光司氏(1918~2001)の『莊子—古代中国の実存主義』（中公新書）を読んで本格的に『莊子』を読もうと思われた方にお薦めするのが表題の本である。同書は福永氏の莊子講義と呼べるもので、原文、読み下し文、訳解から成る。原文と読み下し文は文字が大きめで見やすい。この本の醍醐味とも言うべき訳解は熊本県出身の西洋哲学者前田利鎌(1888~1931)の莊子研究の影響を受けているという。よって、福永氏の莊子理解は西洋の実存主義的解釈に傾いているという批判も専門家の中にはあるようだが、氏もそのことを承知の上であとがきに「私のような『莊子』の理解の仕方もあるということ、この書を読まれる方々に理解していただければ、それで本望なのである」と述べている。大学卒業と同時に兵隊に徴集された氏は明日をも知れぬ戦地で『莊子』を紐解き心を慰めたという。福永氏の莊子理解が『莊子』という書物の字面上の解釈だけにとどまっていない理由がよくわかる。

（東アジア学科准教授 野田 耕司）



■編集後記■

突然のオンライン授業の開始で、教材作りなどで試行錯誤の日々が続いています。韓国語や中国語の教育にはやはり実際に向き合って発音などを指導することが不可欠で、対面式授業の良さをいままながら痛感しています。一方で、オンライン授業の長所も少しずつ見えてきました。今回慌てている教材をそろえたので、オンライン指導のスキルもアップしたいと思います。（ド）

発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科

編集人 土井 浩嗣（東アジア学科長）

〒860 - 8680 熊本市中央区大江 2-5-1

Tel 096-364-5161（代表）